

佳作

スイカへのちよう戦

鹿児島県 南九州市立大丸小学校四年 中ノ森環

「スイカを育てて、スイカわりをしよう。」

「スイカって本当に、できるんですか。」

五月の始め、先生のてい案に、こう答えた。祖父が、畑できゅうりやトマトを作るけれど、スイカを作っているのは見たことがない。正直、ちゃんと育つか不安だった。

スイカを育てることは、初めてのことばかりだった。私は、くわを初めて使った。祖父が使うところを見ていたので、かんたんだと思っていた。しかし、実さいに持ってみると、「重い。少しの土なのに持ち上げられない」とびっくりした。思うように動かせず、私達のうねは、せまくて山のように高くなった。先生が整えて、私達は苗を植えた。

手のひらサイズだった苗は、くきがどんどのびで、あっという間に葉が多くなった。いきおいよくしげっていくので、見に行くことが楽しみになった。

しばらくすると、小さい黄色の花が咲いた。「わっ、めちやくちやぁりがある」。くきにも花にも、たくさんのあり。「やばい、大変だ」と、ありをふり落とす。よく見ると、ありは黄色の粒を背中に乗せ、列を作っていた。私は「花粉だ」とすぐに思った。

「花粉が付いている花と付いていない花があるんだよ。」

と先生が教えてくれた。さわると、指先に黄色の花粉が付いた。それを花粉が出ない花の真ん中に付けてあげた。花の下には、ビー玉くらいのスイカの赤ちゃんが付いていた。

「かわいい。ほかにもあるかな。」
と、私はつるをかき分けて探した。

それから私は、かわいいスイカの赤ちゃんの成長を見に行ったり、水をあげたりした。

バレーボールくらいまで大きくなり、スイカらしくなってきた。持ち上げてみると、その部分が、白い。先生が、とう明なプラスチックの台ぎを用意してくれて、スイカを一つずつ台ぎに乗せた。それは、地面の虫からスイカを守り、光の反しやでそこまで緑にするらしい。スイカを鳥に食べられないように、ネットもかけた。

スイカはどんどん大きくなり、私達の顔よりも大きくなった。実がなって一か月以上たったので、もう食べられるということだ。

一学期の最終日に、スイカをしゅうかくした。ボンボンとスイカをたたき、一番低い音を探す。つるを切り、いよいよしゅうかくだ。

「えっ、待って。無理だ。動かない。」

スイカは、ずっしりと重くて、びくともしない。持ち上げられなくて、びっくりした。

楽しみにしていたスイカわりも面白かった。ゆうどうされても、なかなか当たらない。聞いた方向と反対に向かう人もいた。バンとわれたスイカは、ちやんと赤くて、ぶんといいにおいがした。少し白いところがあったけれど、食べてみたらとても甘かった。私達のスイカへのちよう戦は、大成こうだ。